

加藤辨三郎 述

# 浄土和讃

1

文責 本誌編集部



和讃は教行信証のエッセンス

『教行信証』が、今のような形にできあがったのは、親鸞聖人の七十五歳のときといわれています。そして、その年には、親鸞聖人は『浄土和讃』を書きはじめられました。

もっとも、そのすこし前ごろから、一首つくり、あるいは二首つくりされていられたようです。それを『浄土和讃』としてまとめられたのは、七十五歳からはじまって、何年か後であったでしょう。そして、第一帖の『浄土和讃』、

第二帖の『高僧和讃』、第三帖の『正像末和讃』とそろい、「三帖和讃」といわれていますが、この「三帖和讃」が完成し、親鸞聖人ご自身が書写をされ、弟子にお与えになったのは、八十五歳ごろでしょうか。親鸞聖人は、九十歳でお亡くなりになっていますから、この和讃が親鸞聖人の最後の晩年の御著述となるのです。

しかもこれは『教行信証』を読めといっても難しいと思う人もあろう、しかしそれではいけないから、その人には『教行信証』で書いたそのエッセンスのところを和讃の形

で、できるだけわかりよく平易に読んでもらおうと、こういうお心でおつくりになられたのでしょうか。

親鸞聖人は、自分で一首おつくりになられるときから、口ずさんでいられたようで、若干の節をつけて、味わいながら、一首一首まとめてお書きになられた。初期の和讃には、右方や左方に、その節の発音とか、長く引けとか、短くといった印がつけてあります。ですから、明らかに最初からただ棒読みになさったのではなく、親鸞聖人ご自身口ずさんでいらっしゃったのでしょう。実際に和讃は、ただ暗記するとか、読みっぱなしというよりか、節をつけて朗唱するのがほんたうだろろうと思います。そうすることによって、純粹の情緒、純粹の感情として、意味は難しくてもわからなくとも、そこに盛られているところの眞実なる慈悲とか智慧とかが、ほのかに肌感じられると思うのです。

なお、讚というのは、佛徳を讃めたたえる歌で、もとはやはりインドでできたんだと思われます。それは經典に偈が出ています。あの偈が讚の古い型でしょう。釈尊がお弟子さんに説法なさったときは、まず普通の話のようにご説法されましたが、弟子たちの記憶に便利のように偈をつくって、いま話したことを要約すれば、この偈になると教えて

いるのです。そのころは、文字はあったが、みな聞いて覚えて暗記しました。記憶して口で伝えていくのです。それには長い散文では容易に憶えられません。偈ですと短いことばですから憶え易い。ましてやそれに節がついていれば、なお憶え易いのです。

#### くめども尽きない尊い教え

梵語の『法句経』は韻文ですから、インドの人は、あれを朗唱するときは、いい気持であつたんだろうと思います。それで読んでいるうちに、ああそうだ、そのとおりだといったように非常に深い感銘であつたとおもいます。このように梵語で書かれた讚を梵讚といいますが、梵語のわかる人であれば、二百でも三百でも覚えることができるであろうと思います。しかし梵語だけでは外国の人は困りますから、中国でも漢訳されました。これも名訳で、やはり韻が踏まれています。漢訳の『法句経』は、純然たる漢文ですから、漢語で歌われている讚、つまり漢讚というのです。

親鸞聖人のころ、今様という口調のいい歌が出ていました。その上、源信僧都が和讃をつくられた。あるいは念佛行者でも和讃をつくって、自分で称えて町を遊行した人も

あります。そういうのを親鸞聖人は勘案されて、自分も和讃で、浄土真宗の教えはこういうものだ、急所はここだと伝えよう、また、み佛の広大無辺なご恩に報いる一つの報恩行だと、佛恩報謝のお気持ちでおつくりになったと思われるのです。

その典型的なのが、この『浄土和讃』であります。『浄土和讃』のなかに、また『讃阿弥陀佛偈和讃』四十八首があります。曇鸞大師がつくられた『讃阿弥陀佛偈』という漢讃を、親鸞聖人は、そのまま忠実に和讃にお変えになりました。ともかくこういう過程で、梵讃から漢讃が生まれ、漢讃から和讃が生まれ、その姿において釈尊の教えが、だんだん大衆の胸にアピールし、日本全土に南無阿弥陀佛の聲が満ちるようになったとわたしは感ずるのです。

親鸞聖人の教えをいただくものは、ご本典である『教行信証』が大事であります。在家者が隅から隅まで読み通すのは容易ではありません。ゆえにわたしは在家者は、この和讃を一首ずつ学んでいくのがよろしいのではありませんか。どの一首もくめども尽きない尊い教えです。

#### 巻頭の二首は総序にあたる

さて、この『浄土和讃』の初めに、二首だけ和讃が載っています。昔からこれを巻頭の和讃といっています。この二首が非常に大事なのです。

弥陀の名号となへつつ

信心まことにうるひとは

憶念の心つねにして

佛恩報ずるおもひあり

誓願不思議をうたがひて

御名を称する往生は

宮殿のうちに五百歳

むなしくすぐとぞときたまふ

この二首だけが巻頭に出ていることについて、かつて金子大榮先生に教えていただきました。それは、この二首が、あと何百首もある和讃の内容を統括している、つまりせんじ詰めれば、この二首で尽きるという気持ちで、巻頭に載せられた。ちょうど『教行信証』でいえば、「総序」に当たるものだと仰せになっておりました。

第一首は、阿弥陀佛の御徳をほめ讃えている。つまり佛徳礼讃です。佛をほめ讃えることが親鸞聖人の宗教の一番根本なのです。佛徳礼讃のうち、如来の本願が一番ほめたえられるのですが、その肝心な本願を疑うのが、われわれの常であります。その疑うということが根本的な妨げで、本願は真実におわします。それを疑うというのは、疑いの罪になります。第二首では、これを戒めてあるのです。これは親鸞聖人ご自身の信心生活のなかで、このとおりご経過なさったのであろうと思われまます。

『教行信証』のなかに「三願転入」という有名な表白文があります。表白というが、いかなれば告白しておいでになられます。それによると、親鸞聖人は、最初は、さまざまな善行を行ない、悪を退けるような努力、そういう道を一所懸命につとめられました。ことに比叡山では、常行堂の常行僧でいられた。毎日、過酷な行を、型のとお励まれました。阿弥陀佛を目の当たり仰ぎたいというお心持で、一所懸命ご勉強になりました。したがって、善を努め悪を退けるといふ毎日のご生活であつたと思うのです。

やがて、善を努めて悪を退けるといふ、それはその通りだが、わたしたちはあまりにも煩惱熾盛、罪悪深重であつ

て、善を修めることは、なかなかできないという自覚が生まれ、この上は本願を信じ念佛もうすばかりと、ただ念佛の信心生活にお入りになります。

この善を努め、悪を退ける修行というのが、第十九願の教えの境地だとお気づきになるわけです。第十九願で、そういうことを教えてくださることは、まことにありがたいことだ、そのおかげで、自分は自己否定するといふふうに導かれて、ただ念佛の世界に入れていただいたのだ、ありがたいことだと仰せになりました。

#### 要は念佛を称えること

そしてただ念佛の世界に入つて、最初はおそらく何万遍も念佛もうすといふことを努めたのではないでしようか。そのころ法然上人のお弟子さんの大部分は、一日にすくなくとも三千遍称えなければならぬとか、あるいは一生に百万遍称えなければならぬとか、そういう遍数に一つの目標を置いている時代でしたから、親鸞聖人も、恐らく一心不乱に念佛を称えなければならぬ、多いほどいいとお感じになった時期があつたのではないかと思ひます。

そうするうちに、これは本願を疑つてことになるの

ではないか、と。本願中の本願は、第十八願である。その第十八願には、お念佛の遍数ということは書いてない。書いてないどころではない。「乃至十念」とお約束くださっている。その乃至とは限定を定めないとことだ。ゆえに一千遍称えてもいいが、十遍称えてもいい、また一遍でもいいという乃至もある。したがって限定はない。それよりか南無阿弥陀佛を称えるか称えないかということが分かれ目であって、南無阿弥陀佛と一声称える、ただその一声を称えたところで、われわれは正定聚の位、つまり必ず佛にしてくださいという境地に入れていただけるといふ信心、そこへお入りになるわけです。

しかも自分が考えてそうしたのではなく、お念佛そのもののお力で自然にそのように導かれた。それは第二十願で、果たさなければ自分は正覚をとらないと法蔵菩薩が誓ってくださいっている。その果たし遂げずんばということは、すなわち、われわれをしてそこへ導きたまうところのお約束なのです。そのお約束、すなわち法蔵菩薩即阿弥陀如来のお力によって、自分はおのずから、念佛の遍数にとられなくなつた。要は念佛を称えるか称えないかで、われわれの人生が一変するのです。凡夫が凡夫のまままで佛になつて

いくことのできる道に入れていただく、本願至上の道に、初めて転入なされるわけです。それが三願転入です。

三願というのは、第十九願の時代が長くありました。そしておかげをもつて第二十願の境地、一心不乱に念佛を称える境地へ入れていただきました。そうしたら、その第二十願のもののお力、そのお約束によって、自分は第十八願の「乃至十念」のこの本願一つで救われるということに導かれた。自分は、その弘願海へ転入させられた。それを親鸞聖人は非常に喜んでおいでになるわけです。

その最後の段階は、けつきよく疑いということにお気づきになるのです。これがわれわれにはなかなか気のつかないところですよ。わたしたちの疑いは、もつと次元の低いところ、「本願といたつて何のことかわからないではないか」とか、「大無量寿経といつても、釈尊がお説きになつたとあるが、あれはもう大乘經典で、ずっと後のお弟子さん方が、要するに衆生を救わんがためにそういうものを書いてくれたんだ」とかいう。これも疑いですが、こういう疑いはまことに次元の低い、智慧の浅さがまるつきり露呈されるようなお話にならない疑いなのです。